

大腿骨頭の不安定性により股関節インピンジメントが生じていた一症例

平田明日香¹⁾,磯田真理¹⁾,中村太志¹⁾,監崎誠一¹⁾,西川正治¹⁾

1)医療法人薫風会 西川クリニック

キーワード：FAI・臼蓋関節唇損傷・運動器超音波検査

目 的

大腿臼蓋インピンジメント(以下 FAI)は,股関節痛や組織変性を生じさせると報告されており,また変形性股関節症の初期症状とも言われている.FAI の術後の理学療法については Philippon らが提唱したプロトコルがあるが,術前の理学療法についての報告は少ない.今回我々は臼蓋と大腿骨頭の関係性を運動器超音波検査を用いて評価し,術前の理学療法へ繋げる.

症例紹介

50 歳代,女性.右変形性股関節症.主訴は夕方ごろになると右鼠径部が怠く痛くなる.ROM は股関節外転右 20 度/左 35 度,内旋右 45 度/左 55 度.その他大きな制限なし.MMT は右の腸腰筋,大殿筋,中殿筋,ハムストリングスが 4 レベルであった.右前方インピンジメントテスト陽性.運動器超音波検査で右臼蓋関節唇に損傷を認め,右大腿骨頭は左と

比較し浅層にあった(図 1).

説明と同意

対象者全員に対し,ヘルシンキ宣言をもとに本研究の趣旨を口頭および書面で説明し,同意を得た者のみを対象とした.また対象者は研究への参加の同意をいつでも撤回でき,それによる不利益は生じないこと,更にプライバシー保護について十分に説明を行なった.

経 過

運動器超音波で観察すると股関節伸展位ではより右大腿骨頭は浅層に移動した(図 2).右の寛骨を前傾誘導すると後傾誘導するより前方へ移動した(図 3).前方インピンジメントテストは右寛骨を前傾誘導すると消失した.

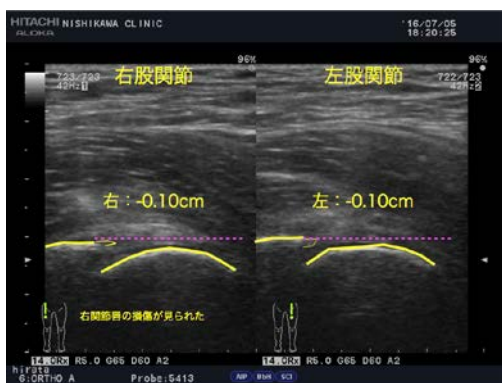


図 1 背臥位 股関節

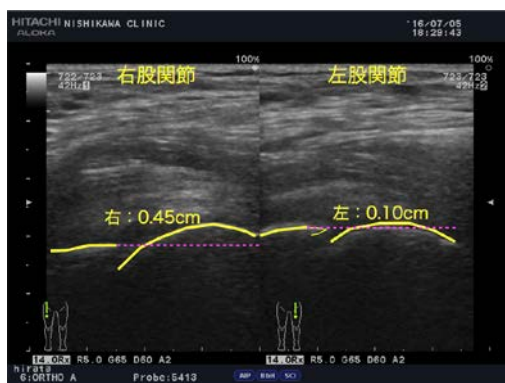


図 2 背臥位 股関節伸展位

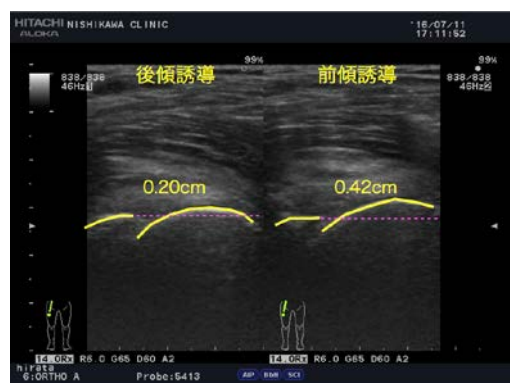


図 3 右寛骨前傾・後傾誘導

考 察

臼蓋関節唇は関節の安定性に寄与するが、損傷により右の大腿骨頭は不安定になり前方へ移動していたと考えた。前方インピンジメントテストが右の寛骨前傾で消失した要因として、寛骨が前傾すると相対的に股関節は外旋する¹⁾ためインピンジメントを回避できたと考える。また、被覆率の増大により動きが出やすくなったと考える。従って、右寛骨前傾誘導時の股関節伸展位大腿骨頭はグローブ近位へ移動していた。しかしこの状態では大腿骨頭は不安定なままである。木村ら²⁾は、腸腰筋は股関節の前方安定性に関与しており、赤筋線維が約半数占めていると報告している。赤筋線維を多く含む腸腰筋の筋力低下、筋持久力の低下により主訴である夕方の怠く痛む症状が出現していたと考えた。従って、大腿骨頭を前方から安定させる作用のある腸腰筋などの股関節安定に働く筋群の強化、学習

が股関節インピンジメントを改善させるために必要であると考える。

理学療法研究としての意義

本症例の前方インピンジメントテストは右寛骨前傾誘導で消失した。寛骨を前傾するためや大腿骨頭の安定性に関しても腸腰筋などの股関節安定に働く筋群の強化、学習が必要であると考える。また一次性変形性股関節症へ移行させないためにも大腿骨頭の前方向不安定を改善させる必要があると考える。

文 献

- 1) 山口光國. 他：結果の出せる整形外科理学療法 運動連鎖から全身をみる. メジカルビュー, 2010, pp82-83
- 2) 木村忠直. 他：大腰筋筋線維構成の比較解剖研究. 昭和医学会雑誌vol151 (5), 1991, pp509-513